

IIBC Newsletter Vol.3

Contents 国内に広がる英語力強化の動き

グループ全体の英語力を強化し、総合力の最大化を目指す エンケイ株式会社	2
社員一人ひとりが世界に目を向け、国際空港としてのブランド力を高めていく 新関西国際空港株式会社	4
TOEIC® 公開テスト第200回受験者の声	6
トピックス 第1回 TOEIC® 公開テスト受験者インタビュー ほか	8



グループ全体の
英語力を強化し、
総合力の最大化を目指す

エンケイ株式会社
静岡県 浜松市

社員一人ひとりが世界に目
を向け、国際空港としての
ブランド力を高めていく

新関西国際空港株式会社
大阪府 泉佐野市



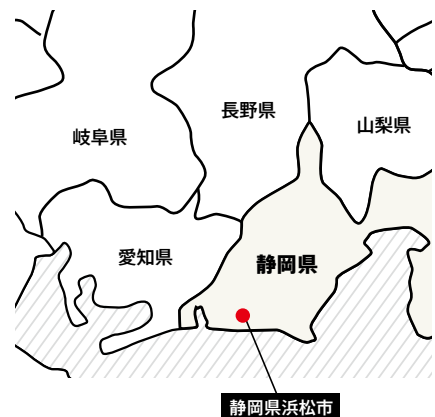
静岡県 浜松市 エンケイ株式会社

グループ全体の英語力を強化し、 総合力の最大化を目指す

静岡県浜松市に本社を置くエンケイ株式会社は、世界を代表するアルミホイールメーカーで、F1（フォーミュラワン）をはじめとしたモータースポーツにも製品を提供しています。同社は早くから海外へ進出しており、現在は、日本、アメリカ、中国、東南アジアの4地域を柱に事業を展開しています。海外拠点を順調に増やし躍進を続ける同社は、社員の英語教育にどのように取り組んでいるのか、お話を伺いました。



エンケイ株式会社
業務統括本部
人事グループ
齋藤友紀氏（左）
業務統括本部
統括本部長 執行役員
長山政且氏（中）
業務統括本部
広報担当 チームリーダー
藤崎芳子氏（右）



英語でコミュニケーションの効率化を図る

日本ではじめてアルミホイールの製造に成功した同社は、業界に先駆けて海外へ進出しており、現在では8カ国16拠点にまで広がっています。グループ全体の正規社員数は8,139人。そのうち7,005人が海外の社員です（2015年7月1日現在）。同社では、グループの経営をより円滑にするために、本社と海外の各拠点が英語でスムーズにコミュニケーションをとって、情報共有や技術指導のスピードを向上させることを目指しています。

「1985年にアメリカに拠点を建てて以降、タイ、マレーシア、中国、インドネシア、フィリピン、インド、ベトナムに進出してきました。現在は日本から100人程の社員が海外各社へ出向しています。海外拠点の社員は基本的に現地採用なのですが、アジアに拠点が増えた際に課題となったのが、コミュニケーションを図るための言語でした。母国語がそれぞれ異なるアジアの拠点の社員が情報を共有しようとすると、やはり共通語が必要になります」（長山氏）

そこで1999年からエンケイタイでは、一定の役職以上の社員が集まって会議を行う場合は、現地の言葉ではなく、英語を使用することにしたそうです。

「その後、アジアの各拠点では、できるだけ英語を使って日本から出向した社員とコミュニケーションをとってきました。しかし、英語

が公用語になっているインドやフィリピンなどの拠点は問題ないのですが、それ以外の国の拠点では、英語力は十分とはいえず、今後どのように強化していくかが課題です」（長山氏）

“グループ全体の英語力を強化することは、グループの総合力の最大化につながる”との考えに基づき、全社的に社員の英語学習を後押ししていくそうです。



グローバル化に向けた社内ポスター

国内でも英語でのプレゼンテーションを実施

同社では、海外の拠点も含めたグループ全社員の意識統一を図るために、定期的に5S監査を行っています。「5S」とは一般的に「SEIRI (整理)」「SEITON (整頓)」「SEISOU (清掃)」「SEIKETSU (清潔)」「SHITSUKE (躰)」の頭文字をとったものです。この5S監査では、これら5つのチェックは元より、各部門の採算状況や活動状況、改善等についてもプレゼンテーションするそうですが、海外の拠点では2003年から、国内では2010年から、すべて英語で行うことにしたそうです。出席する社員のほとんどが日本人となる国内の5S監査でも、英語力強化の取り組みの一環として、すべて英語でプレゼンテーションが行われています。

それは、鈴木社長自らが海外展開を進めるなかで、英語でのコミュニケーション力の必要性を強く感じ、これからの時代は英語力が不可欠

になるので、今はまだ海外の拠点と接点がない国内の社員にも積極的に英語を学習してほしい、との考えからようです。

「2013年に『7つの努力』を策定しました。これは、同年の行動指針『常に努力する』を具現化したものです。この7つの努力項目の中で、社長が最初に挙げたのが『英語力—英語に慣



れる力をつける事』でした。また、社長は30年以上も前から、毎年新入社員の入社式で、「国際人になるための4つのポイント」を伝えています。『①飯をもりもり食べる事 ②日本の歴史を理解する事 ③便利さに反発する事 ④外国語を少々喋れる事』これを実践し、グローバルに活躍できる人材になってほしいと言っています」(長山氏)

このように社長自らが英語の必要性を強く感じていることから、会社全体に“英語を身に付けよう”という雰囲気があふれ、それが社員の英語学習のモチベーションを保つ大きな要因になっているようです。

7つの努力

- 1 英語力 英語に慣れる力をつける事。
- 2 省エネ力 省エネを実行する力をつける事。
- 3 改善力 改善をする力をつける事。
- 4 新技術力 新技術を生み出す力をつける事。
- 5 女性力 女性を活用する力をつける事。
- 6 環境力 環境を良くする力をつける事。
- 7 安心力 安心を与える力をつける事。

各部署が自主的に英語学習に取り組む

2012年からTOEICテストの活用がはじまりました。現在は、年に4回、毎回400人ほどの社員が受験しているそうです。

「TOEICテストのスコアは、昇進する際の判断基準にもなっています。また800点以上のスコアを取得すると受験は免除になります。一人ひとりが自分に合った目標設定をし、達成できるよう努力しています」(藤崎氏)

「毎回、TOEICテストの結果を集計して、各部署の責任者に部署内の受験者のスコアや全体の平均点などを伝えています」(齋藤氏)

TOEICテストの結果は社長にも報告されており、それが各部署の刺激にもなっているそうです。朝礼時に英語の勉強会を開いたり、外部の講師を招いて英会話教室を開いたり、さまざまな取り組みをしています。

毎日メールで配信している社内報などでも、英語学習を支援して

いるそうです。過去に基礎英単語リスト『GSL (General Service List) 2000』から10ワードぐらいをピックアップし、意味や文例などを1枚のシートにまとめてメールで配信したり、現在では、英文法やListening問題を楽しみながら学ぶために、クイズラリー形式にして配信したりと、会社としても後押ししているようです。



「極端な話ですが、文法がわからなくても、単語さえわかればなんとか英会話ができると思ったので、まずは社員に基礎的な単語を覚えてほしいと考えました。GSL2000のメール配信が300回を超えてからは、それまでピックアップした単語の発音と意味をCDに録音して各部署に配布。リスニングCDとして通勤時に聞いてもらうなど活用しています」(長山氏)

海外出張で現地の社員と英語で会話する機会が増えると、単語だけではなく発音の重要性を実感する社員が増えているようで、ますます英語学習が必要になってきているとのこと。

「今後も海外赴任経験者を増やし、英語だけでなく海外の生活や文化に触れてグローバルなものの見方や考え方を身に付け、新たなビジネスチャンスをつかむ力にしてほしいと考えています」(長山氏)

「One Step Forward - 勇気をもって一歩前へ踏み出す」というスローガンのもと常にチャレンジを続ける同社は、今後も世界を舞台に新たな可能性を切り開いていくに違いありません。



大阪府 泉佐野市 新関西国際空港株式会社

社員一人ひとりが世界に目を向け、 国際空港としてのブランド力を高めていく

関西国際空港と大阪国際空港を管理・運営する新関西国際空港株式会社。数多くの国際線が就航する関西国際空港では、インバウンド（海外からの旅行者）対応を充実させる一方で、海外空港との提携や積極的な情報発信によって世界での存在感を高めています。国内外の空港との競争がますます激しくなるなか、同社は社員の英語教育にどのように取り組み、グローバルな事業に向き合っているのか、詳しくお話を伺いました。



新関西国際空港株式会社
国際・事業連携室
企画調整グループ
サブリーダー
吉岡賢氏（左）
総務人事部
調査役（人材育成担当）
田嶋律子氏（右）



実践の場を広げ英語力の底上げを図る

同社は、世界における関西国際空港の存在感やブランド力をさらに高めていくために、2013年4月に国際・事業連携室という新たな部署を創設しました。吉岡氏が在籍するこの部署では、路線拡充に向けて海外の空港と提携したり、国際会議に参加して関西国際空港に関するさまざまな情報を発信しています。そのほか、英語のニュースレターを作成して在関西の総領事館や国内外の空港関係者などに配付するなど、関西国際空港の魅力や利便性をアピールする業務を担当しています。

「当社では、英語が欠かせない業務が多く、なかでも国際・事業連携室はもっとも英語を使う部署といえます」（吉岡氏）

国内外の空港との激しい競争に勝ち抜いていくために、同社は社員全体の英語力の底上げにも力を入れています。

「外部講師を招いた研修や通信講座を活用した研修を実施していましたが、最近では、机上の勉強だけではなく、実際に英語を使う機会も増やしています。提携先の空港へ社員を派遣し、現地の職員と意見交換などを行う人材交流もそのひとつです。海外に行って英語で会話することで英語学習のモチベーションが上がったという声も届いています」（田嶋氏）

海外空港との人材交流を通して社員一人ひとりが今以上に世界に



同社の社員が参加する関西国際センターのプログラムの様子

目を向けてグローバルなものの方や考え方を身に付けていただきたい、という思いもあるようです。

また同社では、海外の外交官や公務員、研究者などが日本語や日本文化を学ぶ『国際交流基金 関西国際センター』（以下 関西国際センター）という近隣の施設から研修生を招き、実践的に英語を用いる機会を設けています。

「関西国際センターの研修プログラムの中に、関西国際空港の特徴や取り組みを紹介するプログラムをつくっていただきました。そのプログラムに参加したい社員を毎回募り、関西国際センターで学ぶ海外の方々との交流を続けています。関西国際センターは日本語を学ぶ場所ですが、日本語を学ぶうえで英語でのコミュニケーションが欠かせない場所ですから、プログラムに参加した社員にとっては英語を実践するいい機会になっています」（田嶋氏）

社員一人ひとりが英語を活用できる会社を目指して

英語力強化の取り組みの一環として、同社では2007年からTOEICテストの実施がはじまり、さらに2012年からは新入社員の英語力の測定にも活用されています。

入社時に、自分の英語力を認識してもらうとともに、約6カ月間の英語研修後にもう一度TOEICテストを受験することで、スコアの比較ができ、研修効果の測定や、新入社員の意識改革を促すことにつながっています。

「これまでは、平均で100点ぐらい上がっていて、中には200点以上アップした社員もいました。研修の成果をスコアで実感し、学習意欲が高まっています」(田嶋氏)

2007年にTOEICテストを活用しはじめた頃に比べると、現在は、社員の英語に対する抵抗は徐々になくなってきているようです。



「心のハードルというか、英語に対して尻込みしてしまう気持ちは少なくなってきていると思います。定期的にTOEICテストを受験する社員がまわりに増えたこともあり、英語を学習して話せるようになりたいという気持

ちを持った社員が増えているように感じます」(田嶋氏)

「英語の資料の作成を各担当の社員にお願いする際『英語はそんなに得意じゃないんですよ』などと言いつつも快く引き受けてくれます。日頃業務で英語を使わない社員も、とにかくやってみようという姿勢で取り組んでくれます」(吉岡氏)



今後は、それぞれの部署の社員が海外の関係者と直接英語でやりとりする機会がこれまで以上に増えていくものと見込まれます。

「国際会議に出席すると、環境対策やIT技術の導入状況、あるいは人材育成など、さまざまなテーマについてプレゼンテーションする機会があります。国際・事業連携室のスタッフは残念ながらそれぞれの分野に必ずしも精通しているわけではないので、担当している社員が直接話してくれたほうが説得力があり、関西国際空港を今以上にアピールできるようになります」(吉岡氏)

インバウンド対応を積極的に推進

関西国際空港のターミナルビルでは、“かんくうアイパル”というスタッフが案内カウンターなどでお客様の問い合わせに対応しています。こうしたスタッフはグループ会社の社員で、現在100人ほどが在籍しており、すべてのスタッフが英語で対応できるそうです。

「関西国際空港はアジアの航空会社が多く乗り入れているので、欧米のお客様よりもアジアのお客様が多いのが特徴です。アジアの国々のさまざまな言語にすべて対応するのはなかなか難しいので、基本的には英語で対応する体制にしています」(ターミナル営業部 旅客サービスグループ グループリーダー ^{あがた} 縣有香氏)

アジア圏の旅客に対応する場合は、英語を母国語としない者同士のコミュニケーションとなるため、できるだけ簡単な単語や言い回しでシンプルに表現する能力が求められるようです。

「かんくうアイパルは、ある程度英語力のあるスタッフが揃っているので、経験豊富なスタッフや能力の高いスタッフが講師になって、対応のノウハウを共有するようにしています」(縣氏)

近年、中国便や韓国便が増えたことから、中国語や韓国語に堪能なスタッフも常駐させるなど、英語以外の言語にも対応できる体制を整えています。また、ムスリム(イスラム教徒)のために、ターミナルビル内に祈祷室をつくったり、祈祷室の場所や安心して食べられる食事を提供する飲食店を案内するパンフレットをつくったりするなど、言語以外のところでもインバウンド対応を進めています。

「2014年度は開港してからはじめて、海外から来日されるお客様の

数が国内から海外に向かうお客様を上回りました。海外から来日されるお客様は全国的に増えており、関西国際空港を利用される方も大幅に増加しています。世界と関西をつなぐ空の玄関口として、これからもより多くのお客様に快適に、そして便利にご利用いただけるよう、インバウンド対応を進めていきたいと考えています」(縣氏)

国際空港としてブランド力を高める関西国際空港。今後、世界での存在感はますます大きくなりそうです。



案内カウンターで対応する、かんくうアイパルのスタッフ

TOEIC® 公開テスト第200回受験者の声

1979年に2,773人の受験者から始まったTOEIC公開テストは、2011年から4年連続で年間受験者が100万人を超え、本年5月には200回目を迎えました。回を経るごとに受験の中心を占めるビジネスパーソンや学生以外の受験者も増え、受験者のご職業や受験の目的も多様化しています。今回は、さまざまな目的で、第200回TOEIC公開テストを受験された方々の声を紹介します。

半世紀を経て、二度目のオリンピック通訳を目指す

大学卒業後間もなく、東京オリンピックの通訳に応募し、大磯の選手村でスペイン語圏の選手の通訳を務めました。選手村にはいろいろな国の選手や関係者がいましたが、共通のコミュニケーション言語は英語でした。この時に英語の重要性を痛感し、英語を勉強し直し、翌年には英語通訳ガイドの資格も取得しました。

その後は家庭に入りましたが、子供の手が離れてから、国際協力センターで研修監理員に従事しました。ODAの現地調査のための海外出張の仕事も多く、とても充実していましたが、65歳の時、ボリビアで交通事故に遭って仕事は引退しました。でも体が元気になると、これまで行けなかった、ヨーロッパや北米など世界を旅し、楽しい日々を送っています。

昨年の暮れ、大学の同期がTOEICテストで

最高点の990点を取ったという話に触発され、今年3月に初めて受験しました。945点を取ることができましたが、時間が足りずリーディングの最後の2問に手がつかなかったのが心残りです。ロンドンの英語学校に2週間通い、再度チャレンジしました。

2時間集中しなければいけない試験は、体力や気力も求められます。受けてみて、交通事故後、リハビリで始めた筋トレや水泳なども体力・気力の充実に役立っていることを確認できたことも収穫でした。

思えば、外国人との最初のコミュニケーション体験は東京オリンピック。次のオリンピックまでなんとか体力・気力・知力を維持し、今度は通訳ボランティアとして海外のお客様をおもてなししたいと、毎日がんばっています。



藤本 巴さん Tomoe Fujimoto

1940年、神奈川県生まれ。大阪外国語大学スペイン語科卒業後、商社勤務を経て、日本国際協力センター研修監理員として国内および海外で活躍。現在は初心者向けのスペイン語講座の講師を務める。趣味は読書、映画鑑賞、旅行。

目指すは最高点。TOEIC®テストでいまだにリスニング力の向上を実感!



小橋 正實さん Masami Kobashi
1944年、北海道生まれ。銀行勤務時代、15年間アメリカ、イギリスへの海外駐在を経験。その後、機械メーカーに移り、4年前に退職。現在は英語塾講師と裁判所の通訳を務める。趣味はゴルフ、旅行、映画鑑賞など。

銀行で長い海外駐在を経験し、その後、機械メーカーに移って海外関係の業務に就きました。その時、英文科出身の秘書の女性から初めて「TOEIC」という言葉を聞きました。彼女が900点取ったことを誇らしげに話していたので、自分も実力試しにと受験してみたところ965点でした。とりあえず彼女を超えることができ、一応満足しましたが、同時に、こんなハードな試験は二度と受けたくないと思い、しばらくは受験しませんでした。

退職後、これまでの経験を生かして英語塾の講師を始め、TOEICテストやTOEFL、大学受験などの英語を指導する立場になりました。そこで現在のTOEICテストの内容を実感するために再び受験するようになり、この4年間で9回受験しました。久々の受験ということもあり、悪い時は900点でしたが、良い時は980点をマークすることができ、生徒の刺激にもなっている

と思います。

目指すのは最高点。そのためにいまだに勉強の毎日です。おかげで、特にリスニングの能力が上がり、映画を英語で見てもこれまでわからなかった部分がわかったり、今までは全部を理解できていなかったんだと悟りました。

もうひとつの仕事として、高度なリスニング能力が要求される裁判所の通訳をしていますが、そちらにもTOEICテストの力が生かされています。

海外小説も、翻訳を読むのと原文を読むのでは印象がまったく違います。また、世界のいろいろな人と英語でコミュニケーションを取ることで、世界の文化に触れたり、どんどん視野を広げることができます。「日本語だけでは、受け取る情報も限られており、人生もったいない」、常に生徒にもそのように話し、英語の素晴らしさを説いています。

TOEIC® 公開テスト第200回受験者の声

**英語で手にした人生の恵み。
英語とTOEIC® テストの楽しさを多くの人に伝えたい!**

父が貿易会社を経営していた関係で、小さい頃から身近にあった英語にあこがれを抱くようになりました。高校では尊敬する英文法の先生に出会って、どんどん英語が好きになりました。大学では、国際関係を専攻しましたが、ビジネス英語が一番気に入った授業でした。その後、日本で外国の方々と交流を深めるなど、英語で積極的にコミュニケーションを取り、自分の世界を広げました。

元々私は内向的な性格でしたが、それを変えてくれたのも英語。日本語はあいまいな表現でも意思疎通できますが、英語では自分の意見をきちんと言わないと会話が成り立ちません。英語により、積極的な生き方ができるようになりました。

英語圏の人々と、コミュニケーションするのに、不自由はありませんでしたが、自分の英語レベルを把握したいと思い、TOEICを初めて受験したのは、第60回。その後も、可能な限り続けて受験しています。

TOEICテストは、受験を続けることで真の英語力を維持することができる素晴らしい試験。限られた時間の中で、判断力、注意力、決断力などを駆使して問題に取り組み、2時間集中力を保ち続けることは人間鍛錬にもつながり、仕事や人生にも役立つはず。生徒には、「全問正解しようとせず、得意な問題は確実に、わからないものは迅速にさばいて、全体をやり通すようマネジメントすること」を心掛けるよう言っています。また、私はゴルフが大好きですが、ゴルフのハーフラウンドは約2時間で、TOEICテストと大体同じです。ミスショットもありますが、その場で迅速に判断してさばっていくという点では共通点があります。経験上、TOEICとゴルフは相乗効果が期待できると確信しています。

私は英語と出会って、多くの恵みを人生にもたらすことができました。これからはその恩返しという意味でも、TOEICテストの指導を通して、英語好きな人をもっと増やしていきたいと思っています。



金子 信子さん *Nobuko Kaneko*
杉並区在住。TUFS (Tokyo University of Foreign Studies) 卒。長年にわたり東京・丸の内で行うエージェンツを運営。その後、中高生への受験英語指導を経て、現在は国際外語センター阿佐ヶ谷校でTOEICスコアアップ担当講師を務める。趣味は格闘技系エクササイズやシェイプパンプのほか、ピアノの連弾。

TOEIC® テストの新たな活用法。受け続けることで『脳健康診断』に



勝又 紘一さん *Koichi Katsumata*
1940年、京都府生まれ。大阪大学理学部卒。北海道大学の助教授を経て、理化学研究所・主任研究員に就任。定年退職後も、放射光を使った物性研究プロジェクトに参加。趣味はクラシック音楽鑑賞、写真撮影、旅行。

大学では物理学を専攻し、その後、北大の助教授を経て、理化学研究所で研究に打ち込むなど、これまで一貫して研究畑を歩んできました。自然科学に英語は必須です。論文の読み書きは英語ですし、国際学会での発表はもちろん、質疑応答も英語でこなさなければなりません。英語の論文を読み込むことで、論理の組み立て方を勉強しました。

学者同士だと、学術的な話はお互い専門用語を理解していればなんとかなりますが、日常会話はなかなか難しい。これは、米国のブルックヘブン研究所の共同研究に参加した時、ネイティブの人と会話を重ねながら磨いていきました。

TOEICテストを知ったのはつい最近で、2012年に初めて受験しました。2時間で200問というのはなかなかのボリュームなので、1週間前に問題集を買ってきて慣れるためのトレーニングをしました。

最初は915点でした。公式問題集をやると時間内にほとんど正解できますが、本番になるとその通りにはいきません。その後4年連続受けていますが、これ以上の点数を目指しているわけでもありません。

TOEICテストの結果は統計処理され、試験ごとに点数のばらつきがないと聞いています。ということは、定期的に受験していて急激にスコアが下がれば、認知機能に問題が出てきたと判断できるのではないかと。つまり、『脳健康診断』です。認知症のテストはいろいろありますが、それよりも早期の発見ができるのではと個人的には期待しています。

自分の成績の推移をグラフにして客観的に見るのも楽しいものです。多くの高齢者の方に受けていただきたいですし、脳科学者の方にもTOEICテストの利用について研究してもらいたいと思っています。

TOPICS

1

第1回 TOEIC® 公開テスト受験者インタビュー

これまでになかったコミュニケーションに主眼を置いた英語能力テストの誕生!

今年、第200回を超えたTOEICテストは、「ビジネスの現場で必要とされる英語コミュニケーション能力を測定する世界共通のテスト」というコンセプトのもと日本で発案され、米国の非営利テスト開発機構ETS (Educational Testing Service) にて開発・制作されたものです。1979年12月、第1回TOEIC公開テストが札幌、東京、名古屋、大阪、福岡で開催され、2,773人が受験しました。その後受験者は増加し、現在では世界150カ国で年間約700万人が受験するまでに発展しました。

TOEICテストがスタートした当時の英語を取り巻く環境、受験者の様子はどうだったのでしょうか。第1回TOEIC公開テストを受験された丸山祥夫さんにお話を伺いました。



丸山 祥夫さん
Yushio Maruyama

1932年、鎌倉生まれ。関東学院大学経済学部卒。1954年、戦後初めての第15回日米学生会議に参加。Landor Japanを経て、大学、専門学校、英会話学校、小学校で英語講師50年歴任。現在は、逗子で英会話グループ「ジョンマンクラブ」を主宰。咸臨丸子孫の会会員、日本通訳学会会員。「ジョン万次郎」研究者としても知られる。

第1回 TOEIC公開テストを受験した経緯を教えてください。

当時、私は国際文化会館に勤務していました。英語テストとしては英検が全盛でしたが、他にも多くの英語テストがあり、そのほとんどを受験していました。しかし、コミュニケーション能力を測る英語テストはなく、そこに不満を感じていました。たまたまTOEICテストを発案した北岡靖男さんと知り合いで、試作段階のモニターテストから参加しました。第1回公開テストは私が47歳の時。私と同じようにそれまでのテストに不満を感じていた学生や社会人が受験していましたね。

その後は、どの程度受験されていますか。

その後は年に1回くらい受けていました。最初は905点で、受けているうちに点数が上がって925点になりました。

どのように勉強されていましたか。

TOEICテストはListening がネイティブと同じ1分間に150～200ワード。普通の英会話テープでは練習にならないので、FEN (現 AFN) のニュースを録音して繰り返し聞きました。英語学習でお勧めしたいのはシャドーイングです。英語を聞きながら、それを口に出して追いかける練習法。音英語ですね。

耳で聞くことは大切ですね。

むしろ昔の方が教材がない分、耳英語が実践できていたと思います。ジョン万次郎の時代には、聞いて覚えるしかないから、water は聞いたままに「ワタ」。「ウォーター」よりも「ワタ」の方が通じます。get up は「ゲラッ」、morning は「モーネン」。これを「ジョン万式英語」として皆さんに勧めています。

丸山さんと英語との出会いを教えてください。

終戦の1945年、私は13歳でした。逗子に住んでいて、隣の家に常駐した進駐軍のMP^{*}と交流を持つようになりました。クリスマスには“Silent Night”と一緒に英語で歌って、ターキーをご馳走になりました。そのうち日常会話はペラペラになり、ジープに乗って通訳をしたりしていました。その後、大学時代、戦争で中断していた日米学生会議が1954年に再開となり、そのメンバーとして渡米したこともあります。

TOEICテストにはどのようなメリットがあるとお考えでしょうか。

現在、母校の関東学院で就職指導を担当していますが、「600点取ったら履歴書に書きなさい。英語の実力をアピールできるから」と言っています。そういうメリットをもっとPRしてもよいと思います。TOEICテストは英語学習の目標になります。そして、受けることでやる気がでる。「やる気」の「気」は「木」、すなわちモチベーションツリーです。その木はどんどん育ってきます。学生にも、「年1回の健康診断のつもりで受けなさい」と言っていますし、できるだけたくさんの方に受けてほしいと思います。

どうもありがとうございました。

^{*} MP:「Military police」の略。アメリカ軍の憲兵。

TOPICS

2

「IIBC セミナー in 東京」を開催しました

7月31日、東京・ベルサール半蔵門において、大学・短大の管理職・教職員の皆さまを対象に、グローバル人材育成に関する「IIBC セミナー in 東京」を開催いたしました。今回のテーマは「大学におけるグローバル化への取り組み」。今、少子高齢化による国内市場の縮小に伴い、産業界では世界市場で活躍できる真のグローバル人材が求められています。日本政府の成長戦略にも、日本の大学の国際化、産業界でのグローバル人材の育成が急務とされています。

セミナーでは、基調講演として、日本経済団体連合会 教育・スポーツ推進本部副本部長 長谷川知子氏に「企業が求めるグローバル人材と大学との連携に向けた経団連の取り組み」と題し、産業界が求めるグローバル人材とは何か、企業のグローバル人材育成の取り組みの現状、そしてグローバル人材育成に向けて大学に何を求めるかについてお話いただきました。

続いて、大学側のグローバル人材育成の取り組みについて、2014年、文部科学省の「スーパーグローバル大学(SGU)」に採択された東京外国語大学と芝浦工業大学の事例を紹介していただきました。東京外国語大学からは、大学院総合国際学研究院教授 吉富朝子氏より「東京外国語大学の取り組み：英語学習支援センターとグローバル人材育成言語教育プログラム」について、芝浦工業大学からは、副学長 米田隆志氏および大学院 理工学研究科教授 山崎敦子氏より「芝浦工業大学 SGU での取り組みとグローバルコミュニケーション育成」について、それぞれの大学のグローバル人材育成への体系的な取り組みおよび TOEIC テスト、TOEIC Speaking & Writing を活用した英語教育についてお話いただきました。



大学関係者138人が参加。大学におけるグローバル人材の育成について真剣に聴かれていました。

TOPICS

3

エッセイライティングワークショップ(東京・大阪)を開催

2015年7月28日東京、29日大阪にてエッセイライティングワークショップを開催いたしました。

本ワークショップは、2015年度第7回 IIBC エッセイコンテストへの参加を予定されている高校生を対象に、少人数のグループ形式で行われ、講師から個別のアドバイスを直接もらえるなど、英文エッセイの書き方を一日で学ぶことができる内容になっています。

東京の講師には立教大学経営学部 国際経営学科助教授の Gene Thompson 氏と Nerys Rees 氏、大阪の講師には関西学院大学総合政策学部の Daniel Thomas O'Keeffe 氏と Jeremy McMahon 氏をお迎えし、東京は30人(男性:6人、女性:24人)、大阪は14人(男性:5人、女性9人)の高校生が参加しました。

午前中は、自己紹介を兼ねたイントロダクションを経てエッセイライティングの基礎知識講義(構成・各パラグラフに入れるべき内容・使える表現等)、午後は、実際のエッセイライティングが行われました。高校生の皆さんは午前中に学んだ内容をもとに積極的にエッセイライティングに取り組んでいました。講師の皆さんも高校生それぞれのエッセイの構成案を見て一人ひとりにアドバイスし、丁寧な添削や高校生からの質問にわかりやすく回答する姿が印象的でした。参加者からは、「講師の先生から直接アドバイスをいただいたのがとても良かったです!グループワークもすごく楽しかったです」「IIBC エッセイコンテストに出すために参加したが、AO 入試や志望理由書など受験に必要なことにも使えると思った。初めて会った人と仲よくなれたし、大学の講座みたいで楽しかった」などの声をいただきました。この中からひとりでも多く今年度のエッセイコンテストへの応募につながることを願っています。



ネイティブの講師からのアドバイスを受け、エッセイに取り組んでいる様子。

編集後記



今号でも、Vol.2に続き、「国内に広がる英語力強化の動き」として新たに2社の事例をご紹介します。早くから海外へ進出されたエンケイ様は、「グループの総合力の最大化につながる」として、海外拠点、国内を含めグループ全体の英語力強化に力を入れていらっしゃいます。今号では、その取り組みについて伺いました。一方、新関西国際空港様では、急速に増えている海外からのお客様対応のために、社員の皆様がどのように日々の業務に取り組まれているのかなどをお聞きする貴重な機会を頂戴しました。

また1979年からスタートしたTOEIC 公開テストが、今年5月に第200回目を迎えたことをきっかけに、第1回と第200回の公開テストを受けられた方々に直接お会いしてお話を伺うことができました。それぞれの目標に向かって努力されていらっしゃる、このような受験者の方々に支えられて今があることを改めて実感しています。(IIBC 広報室一同)

お問い合わせ

IIBC 世界は、あなたでつながる。
一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会
The Institute for International Business Communication

広報室 03-3581-4761

東京都千代田区永田町 2-14-2 山王グランドビル TOEIC®公式サイト <http://www.toeic.or.jp>
ETS, the ETS Logo, PROPELL, TOEIC, TOEIC Bridge, TOEIC BRIDGE are registered trademarks of Educational Testing Service in the United States, Japan and other countries and used under license.